
ラブコメ？

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブコメ？

【Nコード】

N0987B

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

作者が子供のころ本当に経験した話を高校を舞台に置き換え、さらに多少…いやかなり脚色して作り上げたコメディ風ストーリー……なのかな？注・登場人物や舞台となる場所などの設定は完全にフィクションです

Part 1: プロローグ

とある金曜の放課後、松林高校しょうりんこうの教室にて。

「おい、孝？ なにをそんなにキョロキョロしてるんだ？」

一人の男子生徒が教室の出口付近でなにやら周囲の様子を伺ってるのを不審に思った別の男子生徒がたずねる。

「ん？ ああ、勇太か。オレがここまで警戒してる理由はわかってるだろ？ アイツがいなかどうか確かめてるんだよ」

孝と呼ばれた男子生徒は、勇太というらしいたずねてきた男子生徒にそう返す。

「ああ、アイツか…… お前も大変だよな…… 入学して初対面でアレじゃあな……」

勇太は「アイツ」というのを瞬時に理解し、同情するような視線を投げかけた。

ああ、自己紹介が遅れたな。オレは八坂やさか 孝たかし。この松林高校に通う高校1年生だ。

そして今オレに話しかけたのが深溝ふかみぞ 勇太ゆうた。この高校に入学してすぐできた数少ない友人で、今じゃすっかり親友だ。

それで、さっきからオレが恐れている「アイツ」とは……

Part 1: プロローグ（後書き）

遅ればせながらネット小説ランキング（現代コミカル部門）に登録しました。

投票していただけたら幸いです。

Part 2：逃げる者と追う者

孝は帰り支度を済ませて、周囲に「アイツ」がいないことを確認すると、すばやく教室を飛び出した。

校門を出るまでは安心できないと常に周囲に気を配りながら昇降口を目指したのだが……孝は自分の行動が遅かったことを痛感した。

「ここで待つてればかならず孝くんは来るはず。教室まで行って追いかけてこになるよりこの方法のほうが確実よね。しかも今日はまだ靴があるから帰ってない。今日こそ孝くんを捕まえるんだから」
孝が「アイツ」と呼んで恐れる女、古川ふるかわ 明日実あすみが孝の下足箱のところで待ち構えていた。

（さて、どうしたものか……このままじゃ間違いなく捕まるな。何か逃げ切るための作戦考えないと……）

孝が物陰に隠れて様子を伺っていると、いつの間にか孝の下足箱の前から明日実がいなくなっていた。

（よっしゃ！今のうちに逃げるぞ！）

喜び勇んで孝が物陰から飛び出した直後、上からド。フのコント並みの「タライ」が降ってきて孝の頭を直撃した。タライの直撃は肉体的というよりは精神的なダメージが大きく、孝はヘコみつつも上を見上げた。

「いつてえ……なんでタライが……」

そう言った孝の顔が青ざめていく。

「たーかーしーくーん？ やーつと捕まえた」

下足箱の上からタライを落としたのは、ほかならぬ明日実なのであった。明日実は下足箱から飛び降りると、タライの直撃でまだふらついている孝の腕をがっちりと捕まえた。

「待つて、古川さん？ あなたはいったい何がしたいの？」

どうにかタライの精神的なダメージから復帰した孝が明日実にた

ずねる。

「え？ 私は婚約者である孝くと帰りたいただけよ？ でも孝くんが逃げるんだもの、追いかけて捕まえないと一緒に帰れないじゃない？」

明日実「婚約者」の部分に強調して孝に言う。

「ちよい待った。誰が誰と婚約したって？」

孝はまだタライで痛む頭を押さえながら聞き返す。

「だーからー、私と、孝くんが、よ」

どうやら孝が聞き間違えたわけじゃないようだ。だが……

「オレはまだキミと出会ってから1ヶ月ほどしか経ってないと思うんだが……しかも隣のクラスで全然話したことも無かったのになんでオレなの？」

孝にはまったく婚約などした覚えが無く、昔からの知り合いというわけでもないのに顔は学年でもかなりいいほうに入る明日実がなぜ孝に言い寄るのかわからなかった。

「孝くんはまずその認識が間違ってるのよ。私たちの出会いは1ヶ月前じゃなく、9年も前の話よ。覚えてないの？」

明日実がそうたずねる。

「9年前？ そんなに前に出会ってた？ まったく記憶に無いんだが、いったい9年前に何があってふるか……いや、明日実はおれを追いかけるようになったんだ？」

孝は9年前のことなんてまったく覚えてないと明日実に言った。

「それはね……」

と、明日実は9年前のことを話し始めた。

Part 2：逃げる者と追う者（後書き）

今回は半分以上フィクションになっております。（逃げる作者にぶつけたのはタライではなく掃除用のバケツだったりとか）

Part 3：孝の記憶と明日実の記憶（前書き）

そろそろフィクション全開になってきたかも？ 自分の記憶すら結構あいまいな作者だったり……でもまあ10年以上昔のことなのでご容赦願います。

Part 3：孝の記憶と明日実の記憶

孝の記憶にある限り、明日実と初めて会ったのは高校の入学式直後の事だ。

この松林高校の入試の際に成績がトップだった孝は新生代表挨拶をやらされることになり、入学式で壇上に上がり、簡単ではあるがお決まりともいえる文を読み上げた。

そして式の終了直後に事件（？）は起きた。

各クラスの教室に入ってクラスメイトになった人たちと話をしていたとき、突然教室のドアが開いたかと思うと、一人の女子が突入してきて、孝の前に来てこう告げた。

「八坂孝くん、やっと見つけた……私と結婚を前提に付き合ってください！」

この言葉を言われた直後、孝は一瞬何が起きたのかわからなかった。とりあえず周りを見てみると、教室内にいたクラスメイト全てが孝と同じような状態だった。

「あ、あの、キミはいつたい誰なんだ？」

孝はそういうのがやっとだった。

「孝くん、私のこと忘れちゃったの？古川明日実よ」

明日実が遅ればせながら自己紹介する。

「古川……？ 忘れたも何もそんな名前の女の子の知り合いはオレにはいないぜ」

孝は過去の記憶をほじくりかえしても目の前の女の子に見覚えは無かった。

「だったら今からでも覚えて、それで、返事を聞かせて欲しいかな？」

明日実はそういうと、孝に返事を迫った。

「え、えーと……すまん、まったくシャレになってな……い……！」

孝はイスを引いて立ち上がると、脱兎のごとく教室から逃げ出し

た。

「あつ……待つてよ、孝くん……」

この日この時から孝と明日実の終わりなき鬼ごっこが始まったのである。

だが、明日実は9年も前に出会ってるのだと言い張った。

「あの日にも言ったはずだが、オレは9年前に明日実と会った記憶なんてない。それでも話は聞こうじゃないか」

孝もまた強硬にそう主張する。

「私は9年前にこの松林市に引っ越してきたの。小学校に転入してもなかなか友達ができなくて、いつも一人だったわ。それどころかある日を境にいじめられるようにさえなっていたの。それで、小学校1年生の秋ごろ、その日も私はいじめられていたわ。でもその日は特にひどくて階段の上から突き落とされたの。転げ落ちることなくそのまま一気に落ちたところにたまたま一人の男の子が通りかかって受け止める……ことまではできなかったけど自分の身体を下敷きにして私を助けてくれたわ。あの日名前を聞いたあの男の子があなただったってわけなのよ、孝くん」

明日実は9年前に孝と出会った日のことを詳細に話した。

「うーん……そんなことあったかなあ？ 小学1年の秋のことだろ？ しかも仮にそれがオレだったとして、その程度でオレを追いかけるきっかけになるものなのか？」

孝はなかなか思い出せないのか、悩んでいる。

「まあ、9年も前の話だもんね。でも今話したことは事実だよ。がんばって思い出して。入学式の日は返事を早く聞きたいって言ったけど、今はもう焦らないよ。思い出せたらそれを考えた上で返事を聞かせてね」

明日実は孝にそういうと、「それじゃ、また来週ね」といつて帰っていった。

Part 3：孝の記憶と明日実の記憶（後書き）

果たしてどっちの記憶が真実なのか？まだまだ波乱の起こりそうな次回はどうなる！？

P a r t 4 : 週末（土曜その1）（前書き）

もはや実験はほとんどなくなってフィクション全開なストーリー展開です……

Part 4：週末（土曜その1）

明日実と別れ高校の隣町にある自宅マンションへ戻ってきた孝は、マンションの同じ階にどこかの家族が引っ越してきて荷物を運び込んでいるのが見えたので、どんな家族が引っ越してきたのか気になり、家に自分のカバンをおいたあと、まだ荷物を運んでるその家族のところへ行つて、

「よかつたら手伝いましょうか？ あ、オレ408号室の八坂って言います……って、えええ！？」

手伝いを申し出るついでに簡単に自己紹介してみると、なんとそこにいたのは明日実とその家族だった。

「孝くん……偶然だね」これから同じマンションの住民としてよろしくね」

明日実が笑顔でそんなことを言ってきた。

「ていうか、さっき別れてから少し駅前で何かやってたよね？ なんてまっすぐ帰ってきたオレより早くここにいるのさ？」

孝がごく当たり前の質問を投げかけると、

「えつとね、今日引っ越すことになって、学校の帰りにちょうど近くにいるっていうから車で迎えに来てもらって、そのままこの新しい家に来たってわけなの。まさか孝くんがいるとは思わなかったけどね」

明日実は笑顔でそう答えた。

孝はすぐにも逃げ出したい気持ちになっていたが、一度手伝いを申し出た以上道義的にすぐには帰れず、約1時間ほど荷物の運び込みで汗を流した。

「いやー助かったよ、ありがとう。よかつたら夕食を一緒に食べないか？」

明日実の父親が孝にそう言ってきた。孝は断ろうかと思っただ

が、それを言いかけたときにはもう明日実が孝の後ろに回りこんでいて、「いいよね？」と孝の腕をがちり捕まえていた。

（もはや逃げ場なし、というわけか……）

孝は逃げられないことを悟り、夕食の誘いを受け入れるのだった。

一緒に夕食を、とはいってもまだ荷物が片付かない状態なので、お寿司の出前を取るようになった。

孝はというと、明日実が隣に座って積極的にいろいろ仕掛けてくるので落ち着いて食べることもできず、早々に食事を終えて古川家を後にした。

家に帰ってすぐ引越しの手伝いに出かけたので帰宅時は家の様子など孝はなにも確認してなかった。

改めて帰宅し、居間に入ると、テーブルの上にメモが一枚おいてあった。

“ なんとなく旅行に行きたくなったので夫婦水入らずで1ヶ月くらい行ってくる。生活費は置いていくから、私たちがいない間家の事は任せたぞ。 父&母 ”

孝はそのメモを読むと、無言で破り捨て、

「はあ……またか。ウチの親の旅行好きにも困ったものだ……」

と独り言をつぶやくと、明日実との追いかけてこや引越しの手伝いで疲れたのでさっさと風呂に入って寝たのだった。

翌日は土曜日。学校は休みなので、孝は昼ごろまでのんびり寝てようかと考えていたのだが……

現在時刻、朝の8時。誰かがチャイムを連打している音で孝は強制的に起こされるハメになった。

「誰だよ……こんな朝っぱらから……」

結構寝起きの悪い孝が不機嫌で玄関のドアを開けると、そこには明日実が笑顔で立っていた。

「おはよつ！ どこかに遊びにいかない？」

少し目が覚めてきた孝は驚いた。なぜなら明日実はずでに遊びに行く準備は万全といった格好をしていたからだ。

「……………行かない、おやすみ」

孝はそれだけ言つと玄関のドアを閉めようとした……………のだが、明日実が足を入れて阻止した。

「いいじゃん、行こうよぉ、私たちは婚約したもの同士なんだから」

明日実はドアが閉められないように踏ん張りながらも笑顔を絶やさずに言つた。

「待て。オレはまだ正式にOKとは言つてないぞ。明日実だつて思ひ出したら答えをくれと言つたじゃないか」

孝があわてて婚約の部分を否定する。

「むう……………それじゃもうなんでもいいから遊びに行こうよぉ……………」

明日実は開き直つてなおも誘いをかけてくる。

「やれやれ……………仕方がないな。ただし条件として、他の友達も呼ぶ。それならいいぞ」

孝は遊びに行く条件として二人つきりにならないことを挙げた。そうしないと明日実が暴走する危険性があるためだった。

「できれば二人つきりでどこかに行きたかつたけどここは妥協するよ。それで、誰を呼ぶの？」

明日実はしぶしぶながらも了承し、誰を呼ぶのか孝にたずねた。

「そうだな……………勇太ならヒマそうだな。電話してみるか」

孝はそういうと、いったん部屋に戻り、携帯で勇太に電話をかけた。

「もしもし、勇太？ 今日、ヒマか？ ヒマだったらどこか遊びに行かないか？」

「ああ、いいぞ。それで、お前の家に行けばいいのか？」

「ああ、そうしてくれ。それと、古川もいるから」

「えー!? あの古川が一緒? お前昨日オレと別れた後いつたい何があつた?

「詳しいことは後で合流したら話すわ。それじゃ、ウチで待ってるから」

孝はそういうと、電話を切った。

およそ30分ほどして、勇太がやってきた。

「うお、ホントにいたよ……それで、あの古川と遊びに行くなんてどつという風の吹き回しだ?」

勇太は孝にヘッドロックをかけて明日実から少し離れたところへ連れて行くと、単刀直入にたずねた。

「実は、こうこうこういうわけで……」

孝が事情を説明すると、

「でもよ、孝は覚えてないんだろ? それなのに、どうしてだ?」

勇太はそうたずねてくる。

「なんでだろうな? アイツの強引さに負けたって感じなのかもな」
孝はあきらめたかのようにそう答える。

「それで、オレを呼んだ理由は?」

勇太は別の質問を孝にした。

「まあ、そういうわけで遊びに行くことにはなったが、二人きりだとアイツは何をやりだすかわからないからな。それで、見張りじゃないけど見張りのようなことを勇太に頼むつもりなんだが、イヤだったか?」

孝は勇太にそう頼み込んだ。

「いや、別にかまわないが、オレであの古川を止められるかどうかは自信が無いぞ。それでもいいなら、引き受けるよ」

勇太は快く引き受けてくれたが、明日実だけはどことなく勇太が来てからむすつとした顔をしている。

勇太は敏感なので明日実の変化に気づいていたが、孝は鈍感なのか気づかず、3人はそのまま出発したのだった。

P a r t 4 : 週末（土曜その1）（後書き）

どうにか勇太を呼ぶことで明日実と二人っきりな状況は避けた孝だったけど……まだまだ波乱は続く！？

P a r t 5 : 週末（土曜その2）（前書き）

結局3人で出かけることになったが……？

Part 5：週末（土曜その2）

「それで？ 明日実はどこか行きたいところとかあったのか？」

孝は歩きながら明日実にたずねる。

「えーっと……どこかへ行きたいって言うよりは孝くんと2人つきりで過ごしたかったただだから……」

明日実は歩きながらそう答えた。

それっきり3人に会話はなく、そのまま適当に歩いていった。

「なあ……オレって端から見たらお邪魔虫じゃね？」

しばらく歩いていると、突然勇太が孝にそんなことを耳打ちした。

「いや、そんなことは……」

孝がそう言いかけて何気なく明日実のほうを見ると、今の会話が聞こえていたのか、ものすごい顔で勇太をにらみつけていた。

「……孝、すまない。オレはもうダメだ。この雰囲気には耐えられん！」

勇太は泣きそうな顔で孝にそう告げると、すごい速さで走り去っていった。

「お、おい！ 勇太………ってもういないか、そーいや勇太は陸上部で足速いもんなあ……」

孝は勇太を引きとめようと思ったが、もうすでに勇太は遠くまで走り去っていて追いつけそうになかった。

「これで邪魔者もいなくなったし、二人っきりだね、孝くん、どこに行く？」

勇太がいなくなったのを確認すると、明日実は早速とばかりに孝の腕に抱きついてきた。

「やっぱこうなったか……明日実、歩きづらいから離してくれ」

孝は明日実を引き離そうとするが、明日実は離れたくないと踏ん張り、さらに斜め下から孝を見上げる形で見つめるといふ、並の男なら間違はなく一撃でKOされるであろうことを仕掛けた。

しかし、孝はどうにかその攻撃に耐え切り、明日実を引きはなすことに成功した。

「むう……なんでそんなに嫌がるの……？」

明日実はおも孝に抱きつこうとするが、その全てを孝は華麗にかわしてゆく。しばらくじゃれあうように騒いでいた、そのとき。

「あれ？　そこにいるのって……もしかして、八坂くん？」

突然名前を呼ばれた孝は、その声がした方向を見ると、女の子が一人立っていた。

「ああ、たしかにオレは八坂だが……キミは？　どこかで見たことあるような気もするけど……どちらさん？」

孝はその女の子にたずねた。

「まだ中学の卒業式から3ヶ月も経っていないのに同級生を忘れるなんてひどくないかしら？　桐生よ。桐生きりゅう椿つばき。これで思い出した？」

忘れられていたことにちよつと怒りつつ、女の子は椿と名乗った。「ええ！？　あの桐生さん！？　オレの知ってる桐生さんとはずいぶん違うけど、よく見ると面影があるなあ……」

孝もようやく相手のことがわかったみたいで、椿と話しはじめた。しばらく話していると、

「ねえ、孝くん？　さっきから話し込んでいるけど私のこと忘れてない？」

明日実が口を挟んできた。

「あつ、ゴメンゴメン。つい話し込んだじゃった。ああ、桐生さん、この子はオレの高校での同級生で古川明日実さんだ」

孝は明日実に謝りつつ、椿に明日実を紹介する。

「初めまして、桐生です。ところで……もしかして二人はデート中でしたかしら？　もしそうでしたらごめんなさいね」

椿は孝と明日実が恋人同士だと誤解したらしい。

「いや、まだ付き合っではない。昨日から家が近所になってな、それで今日はほぼ強引に連れ出されたような感じた」

孝がそう椿に言い訳（？）をすると、椿と明日実是对称的な表情をした。

「そんなあ……私はもう孝ちゃんと婚約したつもりでいたのにい」

明日実は残念そうにそうつぶやき、

「あら、まだ付き合っでなかったのですか？ それなら、まだ私にもチャンスが……ゴニョゴニョ……」

椿は付き合っでないことを知って少し嬉しそうな顔をしてなにやらゴニョゴニョ言っている。

「え？ 桐生さん、何か言った？」

孝が椿にそうたずねると、

「まだ八坂くんはフリーってことよね？ だから、言っわ」

椿はそこで一度呼吸を整え、

「私、中学のときから八坂くんのが好きだったの。でもあのころは自分に自信がもてなくて言えなかったわ。でも私は高校に進学して変わった。今なら言える。八坂くん、私と付き合ってください！」

椿は一気にそこまで言い切ると、いきなりのことに何と言ったのか理解しきれない孝に抱きついた。

「へ？ 桐生さん、今なんて……って、えええええ！？」

「あ………っ！……！」

抱きつかれた孝が状況を把握して出した叫び声と、衝撃のシーンを見て絶叫する明日実の声がぴったりかぶった。

「返事はすぐには求めないわ。返事をしてくれる気になったらこのアドレスにメールちょうだい。それじゃ、バイバーイ」

椿は孝に自分の携帯の番号とメルアドを書いた紙を手渡すと、そのまま立ち去った。

「……………」

「……………」
「気まぐしくなった孝と明日実がそのまま家に帰ったのは言うまでもない。」

P a r t 5 : 週末（土曜その2）（後書き）

新キャラ登場でさらにどたばた度を増すこのストーリー、孝の運命はいかに？

Part 6：週末（日曜その1）

マンションの4階についたところで、403号室に住む明日実と別れた孝は408号室の自分の家に入り、部屋のベッドに転がって中学の卒業アルバムを眺めていた。

「女の子って変わるものだなあ……」

さつき会った桐生 椿の中学時代の写真を見ながら孝はそうつぶやいていた。

中学時代の椿は、メガネをかけ、黒い髪の毛を両側で三つ編みにしたかなり地味な女の子だった。

ところがさつき会った椿は、メガネをコンタクトに変え、茶色に染めた髪の毛は三つ編みをやめておさげになっていた。さらに服装も中学時代よりかなり派手になっていた。

「それにしても、まさか桐生さんがオレのことを好きだったなんて……まあ、オレは今のところ誰とも付き合ってるわけじゃないし、問題はないんだよね……でも、明日実もそれほど悪い子ってわけじゃないし……」

こうして答えの出ないまま孝の夜は更けていくのであった。

少し時は戻って、孝と別れた後の明日実は……

「あの椿さんって人、きれいだったな……このままじゃ孝くんがあの人の人に取りられちゃうかも……ううん、それはなんとしても阻止しないと！ 孝くんは誰にも渡さないんだから！」

孝の知らないところで明日実は闘志を燃やすのであった……

翌日の日曜、孝はゆっくりするために出かけることにした。家にいると明日実に捕まって連れ出されるため、精神的にも肉体的にも

落ち着けないのである。

「ふう……さて、どこへ行こうかなと……」

一人つぶやき、孝はさっさとマンションを出た。

そのころ、明日実は……

「孝く〜ん、今日こそ二人きりで遊びに行こうよ〜」

とチャイムを連打している。しかし当然ながらも孝は出かけたあとなのでいるはずがない。しばらく連打し続けていると、隣の407号室から人が出てきて、

「408号室の孝くんならもう出かけたみたいだぞ。それとあまりチャイム連打しないでくれ、うるさいから」

隣人は明日実に孝がもう出かけたことを教え、ついでの注意もしておいた。

「えっ……そうなんですか！？ まさか、昨日の今日であの椿って人に返事を出すんじゃ……こうしちゃいられないわ、それじゃ、失礼します！！ あ、それとうるさくてゴメンなさいっ！」

明日実はそう言うのと、急いで階段を駆け下り、孝搜索のため走り始めた。

そして、孝は駅にやってきていた。

「駅前にいると明日実に見つかる危険もあるし、隣町まで出るか。さすがにそこまでは明日実も気づかないだろ……」

孝は独り言をつぶやくと、定期を使って改札を抜け、電車に飛び乗った。高校のある松林市にやってくると、とりあえず駅前のゲームセンターに入っていた。

適当に遊んでいると、孝は後ろから肩をたたかれた。

「ん？」

孝が振り向くと、そこには……

「おっす、八坂。こんなところで会うなんて奇遇だな」

帽子をかぶって、首からカメラをぶら下げた少年が一人立ってい

た。

「ああ、なんだ、小泉か。びっくりさせんなよ……」

孝はそういつてほっと一息ついた。

彼の名は小泉^{こいずみ} 拓也^{たくや}。自称「松高のパパタッチ」で、とにかくカメヲを手放さず、面白いネタがあれば何でも撮影して、ときどきその相手をゆすつてるといふ噂もあるやつだ。

「お前こそこんなところで何してるんだよ？ ゲーセンって柄じゃないだろ？」

孝が拓也にそうたずねてみる。

「いや、オレは遊びに来たわけじゃない。たまたま散歩しながらネタを探していたときにお前が見えたんでな。お前に関してはちょうど昨日面白そうなネタを仕入れたんでな。それについて聞きたいわけだ」

拓也は孝にそう言いながら一枚の写真を取り出し、孝に見せる。

「ん、なんだ？ いったい何のしやし……」

何気なく写真をのぞきこんだ孝の表情がひきつった。そこには、孝が明日実に抱きつかれている決定的瞬間が写っていたのだった。

「なぜこんな写真があるんだ！？」

孝は拓也に詰め寄る。すると、

「いや、昨日もネタを求めて隣町まで足を伸ばして散歩したら二人と深溝が歩いてるのを見かけてな。こっそり後をつけていったら深溝が走り去った後、その写真が撮れたというわけだ。それで、“松高のパパタッチ”としてはこの事実を記事にする義務があると思うんだ。学年で1、2を争う人気の女子とごく普通の孝とのスキヤンダル。これはいっただいどういうことなのか、説明してもらおうか？ なあ、孝？」

拓也はそう言いながら孝に詰め寄っていくのだった。

Part 6：週末（日曜その1）（後書き）

どうにか明日実から逃げることに成功したと思いきや今度は“松高のパパラッチ”こと小泉に捕まった孝。孝の運命やいかに！？

Part 7・週末（日曜その2）（前書き）

孝
vs
小泉、ゴング！？

Part 7：週末（日曜その2）

「さて、説明してもらおうか、孝？」

ゲーセンの入り口付近で拓也が孝にゆっくり近づいてくる。

「すまん、今はまだうまく説明できる自信がない！」

孝はそれだけ言うと、ゲーセンから出て逃げようとした……が、ゲーセンを出てすぐ何かにぶつかって孝は転んだ。

「あ、すいません……急いでて……うげ」

孝は立ち上がりながら謝り、相手を起こそうと手を差し出すと、そこには明日実がいた。

「孝くんったらひどいよぉ。今日こそ二人きりで遊びに行こうと思っただのに、一人で行っちゃうんだもん」

明日実はそういつて頬をふくらませている。

「おお！ 渦中の二人のツーショットじゃないか！ こりゃちょうどいい！ 古川さん、あなたはずいぶんとここにいる八坂と仲がいいようですが、なにか特別な関係とかはあるのですか？」

不意を付かれて逃げられたと思い、あわてて追いかけようとゲーセンを飛び出してきた拓也が追いついてきて、明日実に孝との関係をたずねた。

「えっ？ 私と孝くんとの関係？ それはね、婚約者なの」

明日実は笑顔でそう宣言した。

「こ、婚約者！？」

拓也もさすがに予想外の答えが出てきて戸惑っている。

「いや待て、まだそこまで行ってないだろ。せいぜい同じマンションの住民ってとこまりだろうな」

あわてて孝が否定するも、すでに拓也は孝を無視し、明日実の言葉をメモして、複雑な表情をしている。

「婚約者ねえ。孝、それはそれでいいとして、もう一つ、今度は声と写真のネタがあるんだが、こっちはどうなんだ？」

突然拓也が口を開いたかと思うと、孝にさっきのとは別の写真とテープレコーダーを放り投げ、それを受け取った孝はまたしても顔がひきつった。写真は椿が孝に抱きついてるシーンで、テープレコーダーを再生してみると……

「私、中学のときから八坂くんのが好きだったの。でもあのころは自分に自信がもてなくて言えなかったわ。でも私は高校に進学して変わった。今なら言える。八坂くん、私と付き合ってください！写真を見た時点で予想はついていたが、テープから聞こえてきたのは椿の告白シーンだった。

「こっちの件に関してオレが知りたいのはまずこの女の子が誰なのか、ということ。そして、なぜ突然こういう事態になっているのか、だ」

拓也はいまだ顔がひきつった状態の孝にそう言って、今度は逃げられないように孝の腕をつかんだ。

「やれやれ……こうなったら話さないと離してくれなさそうだな……しゃーねえ、全部話すよ。まず、あの女の子はオレの中学時代の同級生で、昨日街中で久しぶりに会って、オレと明日実が付き合ってるんじゃないかと誤解して、それを否定したらそうなった、というわけだ。わかったか？」

孝はあきらめたように一息つくと、昨日椿と会ったことなどを話した。

「ほう。それで、孝としてはどっちが本命なんだ？」

拓也が核心をつく質問をぶつけた。

「あ、私もそれ聞きたい！」

それまで黙っていた明日実が話に乱入してきた。

「あ……悪いがまだ決めてない。まだもう少し時間をくれないか？　ってか拓也、お前まさかさっきの話を新聞部に持ち込むつもりか？」

孝は答えを引き延ばすと、話を変えて、さっきとは逆に拓也に詰め寄った。

「さーって、それはどうかな？ それじゃあ、また明日学校で会おう、さらばだ」

拓也はどっちとも言わないまま孝の追及を逃れ、走り去った。

「あのヤロ……持ち込む気だな……」と、もうこんな時間か。買い物して帰らないと。それじゃ、またな、明日実……ぐえ」

孝が時計を見ると、すでに夕方の5時を回っていたので、帰ろうとしたところ、明日実に首根っこをつかまれて孝は一瞬呼吸が止まった。

「孝くん、今のはどういうこと？ 買い物して帰るって？」

明日実は孝にそうたずねる。

「ああ、そっぴや誰にも言ってなかったな。家には今オレ一人しかないんだよ。両親が突然旅行に行っちゃまってな。だから自分のメシは自分で調達しなくちゃならないんだけど、昨日までに冷蔵庫の中身使い切ってしまったから今日は買い物しないといけないんだ。だからもう明日実と遊んでる時間はないんだ、悪いな」

孝が事情を説明すると、

「えっ、今孝くんしかないの？ それじゃ、ご飯の準備とか大変じゃない？ よかったら私が作りに行こうか？」

明日実は目を輝かせてそうたずねた。

「いや、親が突然旅行に行くなんて慣れちゃってるから料理も結構こなしてるし、それほど大変じゃないよ。だから大丈夫」

孝は明日実の提案をやりわりと拒否した。

「むう、ほんとに大丈夫？」

明日実は再度確認する。

「ああ、大丈夫だ。それじゃ、オレは帰るぞ。また明日な」

孝は明日実にそう告げると、駅まで走っていった。

P a r t 7 : 週末（日曜その2）（後書き）

一体いつになったら孝に平和な日々は訪れるのか？そして告白後動きのない椿は？次回、週末（日曜その3）、お楽しみに！

P a r t 8 : 週末（日曜その3）（前書き）

日曜夜、一人で夕飯を用意する孝は……

Part 8：週末（日曜その3）

孝は夕飯の買い物自宅の近所で済ませると、あとは寄り道しないで帰宅した。

「さて、と……何を作るかな」

買ってきた物を冷蔵庫にしまいつつ、今日の夕飯を考え、無難にカレーを作ることにした。

手際よくカレーを作り終え、食べようかというまさにそのとき、チャイムが鳴った。

「はい、誰ですかと……」

孝はスプーンを置き、玄関に向かい、ドアの覗き穴から外を見ると、明日実が何かを持って立っていた。

「明日実？ いったいどうした？」

孝がそう言いながらドアを開けてやると、

「孝くん、夕飯作れた？ これ、ウチで作ったもののおすそ分けなんだけど、よかったら食べて♪」

明日実はそう言つと、孝に肉じゃがの入ったお皿を手渡した。

「あ、ありがとう。今ちようど食べようかと思ってたところだったんだ。食べ終わったらお皿は洗って返しに行くよ」

孝は素直に礼を言った。

「あ、別に洗わないでもいいよ。それじゃ、またね♪」

明日実は笑顔のまま帰っていった。

「さて、食べるか……」

孝は明日実を見送った後、もらった肉じゃがとカレーで夕飯を済ませたのだった。

夕飯を終え、孝が自室でテレビを見ながらくつろいでいると、またもチャイムが鳴った。

「今度は誰だ……？」

孝が玄関ののぞき穴から外を見ると、今度は椿が立っていた。

「桐生さん？ どうしたの、こんな時間に……」

とりあえずドアを開けてみると、

「八坂くん、いま時間大丈夫？」

椿はいきなりそうたずねてきた。

「ああ、今は親もいないし大丈夫だけど、どうかしたの？」

孝がそう答えると、

「実は、ちよつと相談したいことがあるんだけど……いいかな？」

椿は孝にそう告げた。

「相談事？ まあ、とりあえず玄関で立ち話もんだから上がりなよ。散らかってるけど」

孝はそう言つて椿を居間に通した。とりあえずお茶を入れて椿に出してやり、

「それで、相談事つて？ オレに解決できるようなことなの？」

孝は単刀直入に椿に問いかける。

「うん。というか八坂くんにこそ解決してほしい問題かも」

椿はそう話す。

「オレに解決してほしい？ よくわからないけど、とりあえず話してみても」

孝は椿を促した。

「うん……あのね、昨日八坂くんのが好きだつて言つたよね？ あの後すぐ帰つたんだけど、帰る途中でここ数ヶ月私に付きまとつてるヤツが現れて……」

椿はそこで泣き出してしまい、しばらく話が進まなかった。

つまり、椿の話を要約すると、こうなる。

“椿に付きまとつてるストーカー男がいる。ソイツは椿が孝に告白したのも全部見ていて、帰る途中で椿の前に現れて、「なんであん

なヤツなんだ、どうして自分を見てくれない」などと喚き散らし、そこからどう話が飛んだらそうなるのかわからないが、孝に決闘を挑む気でいるらしい」ということだ。

「……それで、要はオレにそのストーカー男を倒してほしい、と。そういうことでいいのか？」

孝は話を聞いた後、椿に確認する。

「う、うん……なんか去り際に、“あんな軟弱そうな男にこのボクが負けるはずはないんだ”とか言ってたんだけど、たしか八坂くんってケン力強かったよね？」

椿は相手が孝の外見だけで判断しなめていることを告げた。

「ああ、腕っぷしはそれなりに自信あるぞ。よし、その話引き受けた。ただ、一応言っておくけど、これはまだ昨日の告白の答えとは関係なく、一人の男として引き受ける。まだ答えを出すには時間がかかりそうだ」

孝はストーカー男退治の話を引き受け、念のため告白とは関係なく行動するということを伝えた。

「うん、答えはゆっくりでいいよ。ごめんね、こんな時間にいきなり押しかけちゃって……ところで、ご両親はいらっしゃらないの？ さっきは“今はいない”って言ってたけど」

すっかり落ち着きを取り戻した椿はこの家に孝以外いないことに気づき、孝にたずねた。

「ああ、両親は旅行に行ってる。よくあることだからもう慣れちゃって気にもならないよ」

孝はそう答えた。

「そっか……ご飯とかは大丈夫なの？」

椿は明日実と同じ質問をする。

「それ、明日実にも聞かれたけど、問題ないよ。さっきも言ったけどこういうことは慣れてるから料理もそれなりにできるしな」

孝は笑いながら椿に答える。

「そっぴや八坂くん、中学の調理実習とかでもみんなを引つ張つてたもんね。うん、それじゃあそろそろ私は帰るわね」

椿はそう言つて立ち上がった。

「あのさ、桐生さん、なんだか苗字で呼ばれると落ち着かないからさ、“孝” って呼んでくれないか？ 明日実もそう呼んでるし」

孝はそう椿に頼む。

「うん、わかつたわ、孝……くん。じゃあ私も“椿” って呼んでね。」

椿も孝にそう頼む。

「あ、ああ……わかつた、椿。あ、そうだ。そのストーカー男の退治はいつやればいいかな？」

孝は玄関先で椿にたずねる。

「明日にでもそいつと直接話してメールするわ。正直話すだけなら面白くていいヤツだと思っただけ……」

椿はそう答えた。

「ああ、わかつた。それじゃあ、気をつけて帰れよ…… ってか、送つていったほうがいいかな？」

孝はそのまま見送ろうと思つたが、すでに時刻は夜の9時。最近痴漢が出るとか物騒な話も聞いているので、送ろうか、と提案する。

「大丈夫だとは思っけど…… 来るときに一度だけ妙な気配を感じたのよね。お願いしても…… いいかな？」

椿は断ろうかと思つたが、思い直して孝に頼み込んだ。

「ああ、構わないよ。それじゃ、ちよつとだけ待つてくれ」

孝はそう言つと、部屋から上着と財布、携帯を持って戻つてきた。「お待たせ、それじゃあ、行こうか」

孝と椿は並んでマンションを出た。

Part 8：週末（日曜その3）（後書き）

最近動きのなかった椿はストーカーに狙われていた！行け、孝！
「一人の男として」なんて言い訳してるヒマなんてないぞ！

P a r t 9・週末（日曜その4）（前書き）

椿と孝、二人つきりで何を思う……？

Part 9：週末（日曜その4）

「椿、寒くないか？」

孝はそれほど厚着してるわけではない椿にそうたずねる。

「あ、うん…… 大丈夫だよ。なんかこう言つと恥ずかしいけど…… 孝くんが横にいただけでなんだかあったかい感じがするから……」

椿のそのセリフに、孝は顔が真っ赤になった。

「椿、そういう恥ずかしいセリフはカップルの特権みたいなものだぞ。今のオレたちにはまだ似合わないって……」

顔を真っ赤にして孝はそう言うのがやっとだった。と、突然孝は真剣な表情に戻って、

「誰だ？ 隠れてないで出てこい！」

と叫んだ。すると、物陰から3人の男が出てきて、その中の一人が、

「お前が八坂孝だな？ われらのマドンナ、桐生さんをたぶらかす悪党は退治してくれるわ！」

などと喚^{わめ}いた。

「玖珂くん…… やっぱりつけてきてたのね。悪いけどあなたたちは勘違いしてるわ。孝くんが私をたぶらかしたんじゃないで、前から私は孝くんのことが好きだったんだからっ！」

椿はそう目の前の男たちに告げた。

「椿、こいつらが例のストーカーなのか？」

孝は目は相手から離さず椿にたずねる。

「ええ、そうよ。玖珂くん自体はともかく、周りの二人はケンカ慣れしてるみたいだから気をつけてね」

椿は孝にそう言いながら、孝の後ろに隠れた。

「ったく、まさかこんなに早く椿のストーカーに遭遇するとはな…… まあいい、さっさと始めようぜ。オレを倒すんだろ？ なあ、玖珂とやら？」

孝が玖珂にそう言うのと、

「ボクをバカにしたな！　おい、お前ら、やっちまえ！」

玖珂は後ろの二人にそう命じた。すると、玖珂より一回り大きな体の二人が前に出てきた。

「おいおい……ケンカつてものはタイマンが基本だろう？　しかも玖珂、おまえ自身は戦わなくせにオレのことを弱そうだとか言ったらしいな？　で、その“弱そうな”オレ相手に二人も護衛をつけて恥ずかしいとは思わんのか？　よし、それじゃこうしよう。この戦いに負けたほうは潔く椿から身を引く。それでどうだ？　まさか拒否することはしねえよなあ？　断然そっちに有利な条件を出してゐるんだからなあ？」

孝は大柄の男二人を目で牽制しながら玖珂に話しかける。

「よし、その条件でいいだろう。小金井^{こがねい}、根来^{ねころ}、行け！」

これだけ言われてもなお玖珂に自ら戦う意思はないようで、大柄な二人の男にもう一度命じた。

「……」

二人は無言で動き出すと、同時に孝に襲いかかった。

「ちっ……どうしてもタイマンでやる気はないか。どうしようもないやつらだな」

そう言いながら孝は二人の攻撃をうまくかわしていく。

「……」

小金井と根来の二人は目だけで合図すると、孝を挟み撃ちする形をとって、飛びかかってきた。

「挟み撃ちか……それならつと……」

そう言うとき孝は根来に背を向けて立ち、向かってくる小金井のパンチを受け止めると、鳩尾^{みぞおち}に膝蹴りを一撃。これだけで小金井は倒れた。だが覚悟していたこととはいえ、根来の蹴りをノーガードで背中に受けた孝も一瞬よろめいた。

「さすがにノーガードで食らうときついな……だけどこれでタイマンだな」

孝はそう言いながらゆつくりと根来に接近していった。根来はそれでも蹴りを放ってきたが、孝は軽くかわすと、ふところにもぐりこんで小金井と同じように鳩尾に膝蹴りをぶちかました。

「……」

最後まで無言のまま根来も地に伏した。

「さて、玖珂。お前のお供はもういないぞ。それでもオレとやりあうか、それとも負けを認めて椿に付きまとうのをやめるか、どちらか選べ」

孝は玖珂に二択を突きつける。

「う……ボ、ボクをバカにするな——っ！」

などと言いながら玖珂はポケットからサバイバルナイフを取り出し、孝に飛びかかった。

「どこまでも性根の腐ったヤツだな……」

孝は玖珂の手に狙いを定めて蹴りを放つべく足を振り上げた。放たれた蹴りは玖珂の持ったナイフを上弾き飛ばし、その勢いで玖珂も後ろに倒れ、その目の前にナイフが落ちてきた。

「これで決着ついたな。玖珂、さっきの約束は守れよ。それじゃ、椿、行こうか」

孝は玖珂にそれだけ告げると、椿を家まで送るために立ち去った。

しばらく歩き、椿の家の前に着いた。

「ありがとね。さっきの孝くん、かつこよかったよ。惚れ直しちゃった！」

椿はそう言って孝に抱きついてきた。

「まあ、オレは一人の男としてやっただけだから。それじゃ、オレも帰るな。おやすみ、椿」

孝は椿が離れたところでそう言って椿の家の前から引き返し、自宅に戻って寝たのだった。

Part 9：週末（日曜その4）（後書き）

無事に椿のストーカーを退治した孝、気持ちは椿に傾いたか？
いや、明日実がこのまま黙ってるとは思えないが、果たして週明けの孝を待つ波乱とは？

Part 10 : サプライズ in 週明けの学校 (前書き)

長い週末を乗り切った孝は……

Part 10：サプライズin通明けの学校

本来は身体を休めるためにある週末だが、孝はこの週末ほとんど休まるヒマがなかった。そのせいで通学に30分もかかるのに、孝が目覚めたのは8時10分というほぼ絶望的な状況であった。

「ヤバイ、寝過ぎた！ 急がないとな……」

5分で制服に着替え家を飛び出し、駅まで普段使わないチャリをかつとばし、羽村駅はねむらえきから電車に乗ったのが8時32分。一駅だけ移動し、松林市駅に到着したのが8時35分。そこから力の限りダッシュしたが、校門が見えたところには本鈴がなってしまった。

「ま、間に合わなかったか……」

昇降口で走るのをやめ、4階にある自分の教室に向かうと、教室がなにやら騒がしいことに気づいた。

（なんだ？ HR中にしては妙に騒がしい……なんかあったか？）

そう思いながら、孝は後ろのドアをそっと開けた……だが、教室のドアというものはそっと開けても音がしてしまうもので、すぐにクラス全体の視線が集中した。

「なんだ八坂、珍しいな、お前が遅刻するなんて。まあいい、席につきなさい。今は転入生の紹介の途中だ」

担任の後藤ごとうが孝にそう言つて、そこで初めて孝は教壇のところに先生以外の人物がいることに気づく。

「転入生？ って、ええええええ！？ なんで椿がここにいるの！？」

孝は転入生としてクラスに現れた椿を見て驚きを隠せない。

「なんだ、八坂、知り合いか？」

後藤が孝にそうたずねる。

「ええ、中学の同級生ですが……」

孝がそう答えると、

「それじゃ、席は八坂の隣でいいな。誰か、空き教室から机とイス持ってきてやれ」

後藤がそう指示し、大騒ぎのうちにHRは終了した。

HRが終了するとすぐ、孝は隣の席になった椿に話しかける。

「たしか椿って羽村女子高校に進学してたはずだよな？　それがなんでこの学校に？」

そう問いかけると、

「確かに羽女に進学したけど、ちょっとあそこは私にはレベルが高すぎたみたいで、中間試験が終わるころには授業についていけなくなっちゃって、転校先を探してたの。それで、ずっと好きだった孝くんの通ってる高校がここだって思い出して、ここの編入試験受けて合格して晴れて転入したってわけ。もう先週中には編入が決まってたけど、孝くんを驚かせたくて何も言わなかったんだ」

椿はそう説明した。

「そうだったのか……何はともあれ、またよろしくな」

孝が笑顔で椿に言った。と、そこで孝は昨日のことを思い出し、拓也のところへ向かった。

「拓也……昨日のネタは新聞部に持ち込んだりしてないよな？」

孝が引きつった笑顔で拓也にそうたずねると、

「ああ、今のところはね。もっとも、すでにその気はないから安心してくれていいよ」

拓也はそう答えた。

「それならいいんだが……昨日は記事にするようなこと言ってたのに気が変わったのか？」

孝がさらにたずねる。

「ああ、なんかね……うまい文が浮かばなかったからやめた。とはいえ、もったいないからネタ写真とテープはこのまま保存させてもらうけどね」

拓也はニヤニヤしながらそう答える。

と、そこで授業開始のチャイムが鳴った。

午前の授業終了を告げるチャイムが鳴り、孝が背伸びをした直後。
「たーかーしーくーん、お昼一緒に……」

後ろのドアが勢いよく開き、明日実が入ってきた……。のだが、教室に入って一歩進んだところで足が止まった。

「な、なんで桐生さんがここに……。まさか孝くんのクラスに来た転入生って……」

明日実が椿を見て驚いている。

「そのとおりですわ、古川さん。私はその転入生です」
椿は笑顔で明日実にそう告げる。

「し、しかも席は孝くんの隣……隣同士ならいろんなことや放題……」

明日実が席の位置関係を見てさらにショックを受けている。

「おいおい、明日実、落ち着けて。別に席は先生が決めたことだ。それに授業中椿は何もしなかった。教科書がないから見せてあげていたくらいだな」

孝が明日実にそう告げると、

「いいなあ、やっぱり隣同士だということできるんだもんなあ。それじゃ、お昼くらいは私が一緒にいてもいいよね、桐生さん？」

明日実が椿にお昼休みの間孝を独占してもいいか交渉している。

「さすがにライバルにそこまでさせるほど私も寛大ではないですわ。お昼も私が一緒にいたいのに決まっています」

椿もここは譲らない。そこに孝が口を挟む。

「あのさ、張り合っているとこ悪いんだけどさ、せめて昼くらいはゆっくりさせてくれ……」

すると、

「孝くんはどっちを選ぶの!？」

と二人とも逆にすごい勢いで迫ってきた。

「……いや、だから、あのね……せめて昼くらいは一人でゆっくり

させてくれ〜〜〜!!」

孝はそう叫ぶと、自分のメシとして買ってきた購買のパンを持って教室から走って逃げた。

「あ、逃げた! 孝くん、待って〜〜〜」

「あら、行っちゃいましたか……仕方ありませんね、追いかけても仕方ないですし、お昼は彼女に譲りましょう……」

明日実は孝を追って教室を飛び出し、椿はそのまま教室で昼食に持ってきた弁当を食べ始めるのだった。

一方孝は校舎内をあちこち逃げ回り、明日実をまいたあと、屋上に来ていた。

「ふう……まさか椿が転入してくるとはな……明日実と張り合ってるみたいだし、オレの苦勞が倍増しそうだなあ……」

孝はパンをかじりながらそうつぶやくのだった。

Part 10：サプライズin週明けの学校（後書き）

さあ、椿が転入してきて本格的に明日実との孝争奪戦に突入！
孝の運命はいかに？

あれ？そついや最近勇太の出番が……（苦笑）
次回予告は…未定です（コラ）

Part 11：夕飯と孝の決意

結局、孝は昼休みの間ずっと屋上に隠れ続け、午後の授業開始5分前の予鈴とともに教室へと戻った。

教室のドアを開けようとしたとき、後ろから肩をたたかれたので、孝が振り向くと、

「孝くん、逃げるなんてひどいよ。今までどこに行ってたのぉ〜」

明日実が笑顔を引きつらせながら立っていた。

「あのさ…休み時間や授業中は椿がそばにいるし、放課後はいつも明日実がへばりついているようなものなんだから昼休みくらい一人でゆっくりさせてくれて……」

孝が明日実にそう告げると、

「そんなのダメだよ。昼休み一緒じゃないと“アレ”ができないじゃん……」

明日実がなにやら意味深なことをつぶやく。と、ここで本鈴が鳴ってしまった。

「“アレ”ってのがなんなのか、微妙に嫌な予感がするが、とりあえず授業の時間だな。明日実、またな」

そう言って孝は教室に入ってしまった。

午後の授業を終え、今はHRの時間。担任の後藤が連絡事項を話している中、孝は終わったらすぐに走り出すため、足に力を込めていた。

「それでは、今日はこれまで」

「起立、礼！」

後藤の終了を告げる声、そして日直の号令の直後、孝は一気に走り出した。

しかし、孝の努力は無駄に終わることになった。どうやら先にHRが終わったらしい明日実がすでに孝の下足箱の前で待ち構えていたのだった。

「あつ、孝くん。来た来た。一緒に帰ろ」

前回の失敗（Part 2 参照）が頭をよぎり、逃げても無駄だと判断した孝がそのまま下足箱のところまで行くと、明日実はうれしそうに駆け寄ってきた。

「はあ……」

孝はため息をつきつつ、明日実と一緒に帰ろうとした、そのとき。
「孝くん、よかったら私と帰らない？」

と乱入するかのように現れたのは椿だった。

「ちよつと、桐生さん、孝くんは私と帰るんだから、邪魔しないでください」

明日実が立ちはだかりそう主張すれば、

「孝くんはそれを了承してるの？ もしそうであっても直接孝くんの口から聞かないと納得しませんけど」

椿も後から来た割に譲らない。

「孝くんはどっちと一緒に帰るの！？」

で、結局昼休みと同じことになる。

「3人とも実際かなり近いところに住んでるんだからどっちかと言わず3人で仲良く帰ればいいじゃないか。なんでこんなことでケンカするんだよ？ ケンカする女の子なんてみつともないぞ」

孝はそうもつともな主張をする。

「孝くんがそう言うなら……」

と明日実が折れたことで決着がつき、3人で一緒に帰っていった。

夕方、孝は昨日の残りのカレーを温めていた。と、そのとき突然外が騒がしくなった。

なにやら家のすぐ前で言い争っているような声に聞こえたので、

孝が様子を見にドアを開けると、そこにいたのは椿と明日実だった。
「二人とも……何やってるのさ？」

孝が出てきた瞬間にぴたりと動きが止まった二人に孝が問いかけると、

「あはは……」

「えへへ……」

二人ともただ苦笑いするだけだった。

「とりあえず、二人とも家に入りなよ。そこで騒いでると近所迷惑になるから」

孝はそう言つて二人を部屋の中に招いた。

「それで、二人はなんでここに？ 明日実は同じ階に住んでるからまだわからないことは無いが、椿は？ 椿の家はここから歩いて10分くらいは離れてたはずだね？」

孝が改めてたずねると、

「それは……孝くん夕食を作つてあげたくて……でも来てみたら古川さんが仁王立ちしてるんだもの。それを突破しようとしたらなんだかんたあの騒ぎに……」

椿はそう説明する。

「私も孝くんにご飯を作つてあげたくて行ったらチャイム押そうとしたときに桐生さんが上がってくるのが見えたからそれを阻止しようとしてこうなったの」

明日実も弁解する。

「二人の気持ちはすごくうれしいよ。でも、昨日も言つたように、オレはこういう事態には慣れていて料理はそこの男よりできるつもりだ。完全に拒否するつもりも無いけど、料理に関しては心配はしないよ。でも、2人の気持ちはうれしいよ。ありがとう。そうだ、二人とも夕飯は食べた？ よかったら一緒に食べないか？ 実は昨日カレーを作りすぎちゃってまだまだ余ってるんだ……」

孝が心配してくれたことに礼を言つた後、食事を一緒に食べよう

と誘った。

「いいの！？ もちろんOKだよ！」

「孝くんが迷惑じゃないなら、私も断る理由はないですわ」

明日実と椿、二人ともうれしそうな顔で頷いた。

3人で孝が先ほど温めておいたカレーを食べ、食べ終わると、まず先に動きを見せたのは椿だった。

「孝くん……さっき“料理は”心配いらないって言ったけど、それならほかの事で何か私にできることって無いかな？」

そうたずねると、

「そうだな……特に今のところは問題は無いと思う。でも、なんでそこまでオレの世話を焼こうとするの？」

孝が二人を見ていて思っていたことをたずねる。

「それは……もちろん孝くんのことが大好きだからだよ、女の子ってやっぱ大好きな人の世話をしたいっていう気持ちがあるんだから」

明日実はそうはつきりと言い切った。

「あら、先に言われてしまいましたね。私も古川さんと同じで、孝くんのことが好きだからです」

椿もやはりはつきり孝のことが好きだと言い切った。

「そっか……二人に想いを寄せられてるオレって幸せ者だよな。でもどっちに決めないといけないよな。よし、二人とも、近いうちにオレは結論を出すよ。今はまだどっちとも言えない状況だけど、きっと数日中に答えを出す。ただ、二人にお願いがあるんだけど、たとえ選ばなくても選ばれたほうを恨むことだけはやめて欲しい。恨むんならオレ一人を恨んでくれ。いいかな？」

孝は二人に今の時点で思っていることを伝えた。

「うん、わかった。待ってるよ。それに選ばなくても誰も恨まないよ」

「わかりましたわ。私も決して誰かを恨むことはしません」

明日実も椿も笑顔で孝にそう答えた。

「それじゃ、私たちはそろそろ帰るわね。急にお邪魔しちゃってゴメンね、孝くん」

椿はそう言っていると、明日実と一緒に部屋を出て行った。

「ああ、また明日、学校で会おうな」

孝はそう言って二人を送り出した。

孝の家を出たところで、椿が明日実に話しかけた。

「孝くん、もう少しで答えを出してくれるみたいだし、それまでは休戦ってことにしない？」

「そうだね。あまり争っていると嫌われちゃうかもしれないし、それでいいよ。お昼休みとかは二人で孝くんと一緒にいればいいね」

明日実がそう答える。

「ふふつ。そうですね。それじゃ、私はこの辺で」

椿は明日実に笑いかけ、歩いて帰っていった。

Part 11：夕飯と孝の決意（後書き）

ついに孝が気持ちの整理をつける決心をした！

果たして明日実と椿、孝が選ぶのは？

そして明日実が今回ちょこつとだけ言った“アレ”ってなんだ？

次回あたりその正体が明らかに……なるのか？

今回も出番のなかった勇太は今後出番はやってくるのか？

クライマックスもだいぶん近づいてきたところで……

次回、Part 12：サブタイトル未定（コラ、予告になってないぞ
――危機が、迫っていた……

Part 12: 明日実の“アレ”計画と孝の悲劇（前書き）

さて、明日実がどうしてもやりたがる“アレ”とは……？

Part 12：明日実の“アレ”計画と孝の悲劇

翌朝、孝は寝坊することなく朝7時に起き、パンとコーヒー、それとスクランブルエッグを作って朝食を済ませ、制服に着替えていると、チャイムが鳴った。

「はい、誰ですか……っと」

着替えが一段落したところで孝がドアを開けると、

「おはよつ、孝くん」一緒に学校に行こうよ」

明日実と椿が笑顔で立っていた。

「ああ、かまわないが……二人とも今日はずいぶん仲がいいな？

昨日まであれほど喚いていたのに……」

孝が妙に仲のいい二人にそう指摘すると、

「だって、ケンカしてたら嫌われちゃう可能性もあるし、それを避けるためならこのくらいなんでもないわよ」

明日実も椿も笑いながら手をつないでいる。

「まあ、いいか。まだ着替え終わってないからもう少し待ってて」

そう言つて孝が改めて自分の格好を見直してみると、上半身は制服、下半身はパジャマにしてるジャージというアンバランスな状態だった。

いったん玄関のドアを閉めて部屋に戻り、急いで制服に着替え終わると、7時35分、明日実・椿とともにマンションを出た。

余裕を持って出発したせいか、駅へ向かう途中の3人はそれなりに会話がはずんでいた。

7時50分、羽村駅から電車に乗り、一駅なのですぐ松林市駅に着いた。

駅前のコンビニで昼食を買おうとした孝を明日実が突然引き止めた。

「ん？ 明日実、どうした？ 買っちゃダメなのか？」

孝がそうたずねると、

「うん、今日はその……お弁当作ったから、一緒に食べようと思っ
て……」

明日実が小さな声でそうつぶやいた。

「そっか、わかった。それじゃあ、昼休みを楽しみにしておくよ」

孝はそう言うと、コンビニに立ち寄るのをやめ、再び3人で歩き
出した。

しばらく歩いていったところで、

「おっす、孝。今日は早いな！」

後ろから自転車車が1台走ってきて、孝たちの横で止まった。その
声に孝がそつちを見ると、勇太だった。

「ああ、勇太か。なんかずいぶん久しぶりな気がするな……」

孝がそう勇太に言うと、

「そうだな。土曜に走り去って以来だよな、会ったって」

勇太はそう答える。

「あの日結局いろいろ大変だったんだぞ」

と孝は勇太に文句をつけた。

「悪い悪い。でも、ずいぶん仲良くなったみたいじゃないか。もう
吹っ切れたのか？」

と、勇太は孝にたずねる。

「ああ、悩んでいたがもう少して結論を出せるだろうな。今はまだ
決めてないが」

孝は勇太にそう言い、4人は学校に到着した。

退屈な午前中の授業を終え、昼休みになった。

「孝くん、それじゃ、屋上に行かない？」

明日実が孝のところにやってきてそう言った。

「ん、かまわないよ。椿はどうする？」

孝が椿に声をかけると、

「今日は明日実さんに譲るって決めてましたから、私にかまわず二人で行ってください」

そんなことを言うのと、椿は学食のほうへ歩いていった。

「今日は明日実の番……ってどういうことだろ？ まあいいや。明日実、行こうか」

孝はそう言うのと明日実と二人で屋上へ向かった。

屋上で二人きり・お弁当……とくれば明日実が何をしたかったのかお分かりだろう。

「ま、マジか……明日実？」

孝は明日実がやりたがっていた“アレ”の意味を知って微妙に後ずさりしていた。

「もう、ここまで来てそれはないよ、孝くん」

明日実孝は孝が後ろに下がる分自分が前に進んで一定の距離を保ち続ける。そう、明日実がやりたがっていたこと……それはまさに恋人同士がよくやるようなシチュエーション、ラブライブントの決定版とも言つべきもの、「女の子が男の子に手作り弁当を食べさせる」だった。

「なんでもっと早く気づかなかったんだ……明日実、今からでも遅くはない。中止しよう。オレたちはまだ恋人同士じゃないからこれはやりすぎだ……」

孝がどうにか明日実を止めようとするが、

「ダメ。今日は絶対にやるんだから。ふふっ、もうこれ以上下がないね」

そう明日実が指摘したとおり、孝は屋上のフェンスに突き当たってしまった。

かくして、嫌がる孝に半ば無理やりな感じで「あ〜ん」な大作戦は実行されたのであった。それをひそかに物陰から写真に撮っている人物がいたことに孝も明日実も気づいていなかった。もちろんそ

の人物とは拓也のことなのだが。

食事だけで疲れ果てた孝は午後の授業をほとんど聞いてなかった。授業が終わって担任の後藤がHRのためにやってきても目を覚まさなかった。孝は後藤から愛のムチと称したゲンコツを一発もらってしまった。

相当威力があつたのか、孝はHRの間中ずっと頭を抑えていた。

HRが終わると同時にやってきた明日実、それと椿と一緒に孝は学校を出た。

話しながら歩き、信号を渡っていた、その時。猛スピードで1台の車が孝の少し前を歩いていたら明日実たちに向かって突っ込んできた。「！！！」

突然のことに明日実も椿も動けないでいた。

「危ないっ！！」

孝は急いで明日実と椿を突き飛ばし、ギリギリで車を避けさせることに成功したが、その直後、「ドン」という音と共に孝の体が宙を舞い、そのまま地面に叩きつけられた。

「いたた……」

明日実と椿はどうやら無事なようで、すぐに立ち上がった。だが、「孝くん！？ 孝くん、しっかりして！」

孝が路上に倒れているのを見て、すぐに駆け寄り叫ぶのだった。

しかし、孝の返事はなく、ただ2人の悲痛な叫び声と近づいてくる救急車のサイレンの音だけが響くのだった……

Part 12：明日実の“アレ”計画と孝の悲劇（後書き）

はい、ベタです（笑

暴走車にはねられた孝の命運は？

次回予告できるほど内容決まってるないや（コラ
というわけで、今回はここまで！

Part 13：事故の後遺症（前書き）

事故に遭って病院に運ばれた孝。ところで旅行中の両親はどうした？

Part 13：事故の後遺症

「だめだ、ご両親と連絡が取れない。親戚の方も遠すぎてすぐにはこつちへ来れないらしい……」

孝が事故にあつて病院に運ばれたと連絡を受けた後藤は、急いで旅行中の孝の両親に連絡を試みたが、まったく行き先がつかめず、唯一の頼みの綱とも言える親戚は北海道に住んでいてすぐには来れないとの事。孝と一緒に救急車に乗り病院まで来た明日実と椿はそれを聞いて、

「それじゃあ私たちができる限りで面倒を見ます。孝くんがはねられたのは私たちをかばったせいなんですから、このくらいはやりま
す」

そう後藤に告げた。

「そうか……わかった。ただし、無理はするなよ。学校もちゃんと
出ること。いいな？」

後藤は明日実たちにそう話し、引き続き孝の両親と連絡を取るため一度引き上げた。

しばらくして、医者が明日実たちのいる孝の病室にやってきた。

「孝くんはどういう状態なんですか？」

明日実がそうたずねると、

「外傷はそれほど重くないのですが、どうやらはねられた際に頭を強く打ったらしくそれが原因で意識不明に陥つてるといった状態です。現時点では命に別状は無いですが、急変することも考えられます。どなたかご家族の方はいらっしゃってますか？」

医者は孝の状態を説明した後、明日実たちにそうたずねた。

「いえ、ご両親は旅行中で連絡が取れないみたいで、親戚も遠く離れた北海道に住んでるらしく来れるのは週末らしくて今はいません」
椿がそう答えると、

「そうですか、わかりました。おっと、そろそろ面会時間も終わるようだ。また明日来るといい」

医者は頷くと、面会時間が終わると言って二人を帰そうとした。

「あの、今夜はここにすることってできないですか？」

明日実が食い下がろうとすると、

「それはできない。患者の意識があるなら例外的に認めることもあるが、意識が無く眠り続けている状態では泊り込みをする意味がないからな。大丈夫、夜中は私たちががついている。安心してくれたまえ」

医者にそこまで言われては明日実ももう何も言い返せず、二人は病院を後にした。

病院を出た二人は、家路につきながら、

「孝くんが私たちをかばってはねられるなんて……でも、あれは完全に車側の信号無視よね」

明日実があのとときのことを思い出してそう話し出すと、

「そうね……もし孝くんが死ん……」

椿がそう言いかけた瞬間、

「やめてっ！ その先は言わないで！」

明日実が椿を止めた。

「ゴメン……こんなこと言っちゃダメよね。家族がいない以上私たちが支えてあげなくちゃいけないんだから」

椿は素直に謝った。

「きつと孝くんは助かる。そう信じましょ。それじゃ、また明日ね、椿」

明日実はそう言って椿と別れた。いつの間にか名前と呼ぶほど仲良くなっただけらしい。

「ええ、また明日ね、明日実」

椿もそう言って家のほうへ歩いていった。

翌朝、明日実と椿が登校すると、後藤が呼んでると先に来ていた生徒が言っていたので、二人は職員室へ向かった。

「おお、来てくれたか。八坂の入院している病院から今朝方電話があつてな、八坂は今日の夜明け前に目を覚ましたらしい。ただ……」
後藤がそこで言葉を切ると、

「ただ……？」

明日実と椿がその先をたずねると、

「——こういうことをお前たちに伝えるべきか迷ったが、どうせいつかはわかることだ。ただ、八坂はほとんどの記憶をなくしている。唯一残っている記憶は自分の名前だけ。それ以外のことはお前たちやこの学校のことも含めて一切を忘れてしまっている状態だ。医者が電話で言っていた話によると、一時的なものだと思うから何かのきっかけで記憶が戻ることもあるとのことだが……」

後藤はつらそうな顔で真実を明日実たちに告げた。

「そんな……孝くん……」

「こうしちゃいられないわ、明日実、行きましょう！ 先生、私たちは早退します！」

椿はそう言つと、明日実とともに職員室を飛び出した。

「あ、おい！ 待て、古川、桐生……」

後藤が止めようとしたがすでに二人は走り去った後だった。

椿と明日実が孝のいる病室へ駆け込んだ。すると、確かに孝は目を覚ましてベッドの上で医者診察を受けていた。

「孝くん……」

明日実が泣きながら飛びつこうとするのを医者が止めた。

「おれは確かに孝つて名前だが、君たちは？」

「孝がいきなり部屋に入ってきた二人にそうたずねる。」

「孝くん……私たちのことも忘れちゃったの？」

椿が冷静にそうたずねる。

「忘れた……？ 君たちはおれの知り合いなのかい？」

孝がそこまで言ったところで、医者が二人を廊下に連れ出した。

「八坂くんは見てのとおり自分の名前以外の記憶を失っています」

医者がそう切り出すと、

「ええ。さつき後藤先生から聞いて、急いできたんです。それで、記憶が戻る見込みはあるんですか？」

明日実がそうたずねると、

「今のところはまだわからない。わずかなキツカケで記憶がもどることもあるし、一生記憶が戻らないこともありえる」

医者はそう説明した。

医者の話を聞いたあと、二人はもう一度中へ入って孝にいろいろたずねたが、孝は何も思い出せず、二人は失意のどん底で病院を後にしたのだった。

Part 13：事故の後遺症（後書き）

事故で頭を打ったために記憶を失った孝。

果たして明日実や椿は孝の記憶を取り戻せるのか？

次回、『Part 14：孝の闘いと明日実たちの闘い』（予定）
お楽しみに！

Part 14：孝の記憶を取り戻すための闘い

〔孝視点〕

いったいおれはなぜここにいるんだろう……

目が覚めたら自分の名前以外何も思い出せない……

目が覚めた後おれの知り合いと名乗る女の子が2人来たけどその子たちの名前すら思い出してやれない……

でも、なんでだろう……思い出してやらないといけない気がするのは……

〔通常視点〕

翌日の水曜、放課後になると明日実と椿はまっすぐ孝のいる病院に向かった。

二人が病室に入ると、

「やあ、君たちか。今日はどうしたんだい？」

孝が入ってきた二人に気づいてそうたずねた。

「もちろんあなたのお見舞いよ。それとできることならあなたの記憶を取り戻してあげたいの」

明日実が買ってきた花を花びんに挿しながらそう答える。

「そっか……正直おれは君たちのことを覚えていないわけだが、なにか思い出さないといけない気もするんだ」

孝はうつむきながらそう話す。それに対し、

「焦らないで。ゆっくり思い出していけばいいんじゃないかな？」

明日実が孝のそばに寄ってそう諭す。と、そこに医者が入ってきた。

「おお、ちょうどよかった。君たちに話があったんだ」

医者は明日実たちを廊下に連れ出した。

「それで、話つてのはなんでしょう？」

椿が単刀直入にたずねる。

「八坂くんは車にはねられた割には奇跡的に外傷がほとんどなく、記憶をなくしている以外は健康そのものなんだ。それで、このまま入院しているよりは、自宅に戻って誰かが身の回りの世話をしていればいつかは記憶が戻るのではないかと考えたんだが……どうだろう？」

医者は明日実と椿にそう話した。

「それはつまりあとは記憶が戻れば完治つてことでいいんですね？」
明日実がそうたずねる。

「ああ、そうなる。それで、その世話役をご家族がいない以上君たちにお願ひしたいんだが……」

医者は明日実たちを見てそう言った。

「私はもちろんかまいませんよ。むしろ自分から望んでやりたいくらいです。だって、好きになった人ですから」

椿が真っ先にそう言った。

「私もその案に賛成です。孝くんの記憶を思い出させて元の生活を取り戻すためなら私は努力を惜しみません」

明日実もそう宣言し、

「それじゃ、退院手続きをとるから明日また来てください」

医者は明日実たちにそう話した。

「わかりました。じゃあ今日はこれで。」

明日実と椿はそう言うつと病院を後にした。

翌日、放課後を待つて明日実と椿は退院する孝を迎えに行った。

「まだ記憶が戻ってないのに退院して大丈夫なんですか……？」

孝がその場にいた医者にたずねると、

「このまま入院しても記憶が戻る見込みはほぼゼロだ。だが、知り合いである彼女達と一緒にいれば可能性はある」

医者はそう孝に告げた。

「それじゃ、孝くん、行こうか？」

明日実が孝の手を引き、椿が少ない荷物を持って3人は病院を後にした。

2人は孝を部屋まで連れてくると、

「ここが事故の前まで孝くんが暮らしていた部屋だけど、なにか思い出せそう？」

とたずねた。

「いや……ダメだな。でも、たしかに病院にいるよりは思い出せそう気がする。えっと、明日実ちゃんと椿ちゃん……だっけか？ 思い出してやれないのがほんと悔しいんだが、記憶を失う前のおれと仲がよかったのかな？」

孝がひとしきり落ち込んだあと、明日実たちにそうたずねる。

「仲がよかった、というよりは私たち2人ともあなたのことが好きなの。それで、どっちか選ぶって言った矢先に事故に遭っちゃって

……」

明日実がそう説明する。すると、

「おれのが好き……？ そんなことって……う……あ……頭が……」
孝が頭を押さえてうめきだした。

「無理して思い出そうとしないほうがいいよ。とりあえず部屋に運んで少し休ませなくちゃ。椿、手伝って」

明日実がそう言って、椿とともに孝を部屋まで運び、ベッドに寝かせたのだった。

夜もだいぶ遅くなったころ、孝が目を覚まして部屋から出ると、明日実と椿が居間のテーブルで突っ伏すように寝ていた。

孝はほかの部屋を見て毛布を探し出し、2人にかけてあげた。すると、

「う、ん……」

明日実が目を覚ましてしまったようだ。

「すまない、起こしちゃったか？」

孝が謝ると、

「私…いつものまに寝ちゃって……もう大丈夫なの、孝くん？」

明日実が真つ赤になりながらも孝の体調を気づかう。

「ああ、もう大丈夫だ。それで、明日実ちゃんがおれに関して知っていることをいろいろ教えてほしいんだ。ひとつでも記憶を取り戻すキーワードがあるかもしれないから……」

孝がそう頼むと、

「うん、いいよ」 でも、あまり無理はしないでね？」

明日実は了承しつつも、孝を気づかった。

それから明日実は、事故からさかのぼる様に自分たちにあったことをひとつひとつ話していった。週明けの昼休みの屋上でのこと、週末の追いかけっこのこと、さらにさかのぼり、松林高校入学式のときのことも話していった。と、そこで椿も目を覚まし、

「そこからは私の出番ですね」

と言つて、中学時代のことを話し始めた。

思いつく限りの記憶のキーワードを孝に話してみたが、結局のところ孝は記憶をこの家と家族のことに關する一部を除いて思い出することはできなかった。

「ダメか……もう二度とおれの記憶は戻らないんだろうか……」

孝がそうあきらめたようなことを言った。

「孝くん……」

明日実がなにか言いかけたのを遮り、

「明日実。ここで安っぽい励ましは余計に苦しめるだけよ。孝くん、思い出せないなら思い出せないで、もう一度新しい思い出を作っていけばいいじゃない。たとえあなたが思い出せなくても私たちはきつとあなたを見捨てたりはしない。記憶をなくしても孝くんは孝く

んだもの」

椿が孝にそう言い放った。

「そう……そうだよ。失くして取り戻せないならまた新たに作ればいいんだよね。そういうわけで、孝くん、これから改めてよろしくね」

明日実が孝の手を握り、そう話した。

「そっか。そうだよな。2人とも、こんなおれを見捨てないでいてくれるならこれから改めてよろしくな。今日はもう遅いから、2人ともうちに泊まっていきなよ。親は旅行中だってことは思い出したから、その部屋が空いているはずだしね」

さっそくわずかに思い出した記憶をフル回転させ、孝は明日実たちにそう告げて、自身も部屋に戻っていった。

Part 14：孝の記憶を取り戻すための闘い（後書き）

明日実たちの努力のかいがあつてどうにかわずかに記憶を取り戻した孝。

でも、これって明日実たちとはあまり関係ない記憶だよなあ……

次回、事故から3日ほどで孝は学校に復帰する。学校で記憶を取り戻すことはできるのか？

P a r t 1 5 : 孝の学校復帰とクラスメートの優しさ(前書き)

そして孝は無事に退院し、学校へ戻ってきた。

——記憶喪失だが……

Part 15：孝の学校復帰とクラスメートの優しさ

翌朝、孝たち3人は少し早めに登校すると、職員室にいる担任の後藤のところへ行き、事情を説明した。

「なるほど。それじゃまだ記憶は戻ってないんだな？ だけでも記憶を取り戻せる可能性を信じて退院し、学校に復帰した、とわかった、授業などは配慮するように他の先生方にも伝えておく」
後藤は明日実たちにそう告げ、明日実たちは職員室を後にした。

まだ始業前なので、クラスの違う明日実も一緒に孝のクラスへ入っていった。すると、そこにちょうど登校してきた勇太が入ってきた。

「おはよーっす！ って、孝！ 事故に遭ったって聞いたけどもう大丈夫なのか？」

勇太はすぐに孝に気づき、そう話しかけた。

「あの……」

孝が何か言いかけたのをさえぎり、

「ふかみぞ深溝くん、実はね……」

明日実が勇太に事情を説明した。

「記憶喪失？ ってことは自分のこと以外全ての記憶を失っちゃったのか……それじゃオレのことも忘れている、ということか……」
勇太がそう言っ肩を落とす。と、そこで始業のチャイムが鳴った。

「それじゃ、私クラス違うからまた休み時間に来るね」

そう言っ明日実は自分のクラスーといっても隣のクラスだがーへ戻っていった。

朝のHRで後藤から孝についての事情をクラス全体に伝え、孝が記憶を取り戻せるよう協力してやって欲しいと告げた。と、

「みんな、すまないけど頼む。おれは記憶を取り戻したいんだ」

孝もその場で立ち上がりクラスのみんなに頭を下げる。そこに誰かが、

「水くせえな、八坂。オレたちはクラスメートじゃないか。頭なんて下げんなよ」

と言った。

「みんな……ありがとう……おれはきつとみんなのことを思い出してみせる」

孝は少し泣きそうになりながらそう言った。と、またそこに誰かが、

「思い出さなくたっていい。だって、まだこのクラスになって1ヶ月ちよいしか経ってないんだから思い出すような思い出もないだろう？」

それを聞いて孝はいつそう激しく泣き出してしまふのであった。

孝が落ち着いたところで、HRを終わらせ、授業が始まった。

授業の内容は現時点でどの教科も中学の復習みたいなものだったが、記憶のない孝はそれでも苦戦していた。だが、その辺は隣の席の椿がわからないところを少しづつ教えながら切り抜けていった。

昼休みになり、明日実が様子を見に来た。

「午前中はどうだった？ なにか思い出せそうな感じとかあった？」

明日実がそうたずねると、

「いや……何も。でも、授業の中身はともかく、ほかの事に関してはいつそあきらめて新しく思い出を作っていこうと思うんだ」

孝はそう話した。

「そっか。じゃあもうこのことは触れないほうがいいかな？」

再び明日実がたずねる。

「そっだな……もし何か変化があれば自分でわかるから、それ以外は触れないでいてくれると助かるな」

孝がそう言ったので、この話題は終わりになった。
その後も昼休みが終わるまで孝を囲んで明日実や椿を中心にいる話続けた。

午後の授業もどうにか切り抜け、放課後。

「孝くん、帰ろっか」

明日実がHRを終えて孝のクラスにやってきた。

「ああ、うん。今支度するからちよつと待ってて」

孝はそう言っていると、制服の上着を着て、カバンを持って椿、明日実と一緒に教室を出た。

3人で話しながら歩いていき、やがて数日前孝が事故に遭った現場の近くまで来た。

「あれ？　ここ何か建つのかな？　ていうかいつの間に工事してたんだろっ？」

明日実が交差点の角で何か建物の工事をしているのを見つけた。

「どうやらマンションが建つみたいですね」

椿が近くにあった建設計画の看板を見つけてそう言った。

「ふーん……そうなんだ……」

3人は特にそれ以上興味を持つこともなく、歩き出そうとした、そのとき。上で何かが切れる「ブチッ」という音と誰かの「やばい！　ワイヤーが……」という叫び声がした。

「ん？」

上や周囲から悲鳴が聞こえたので3人がそつちを見ると、鉄骨をワイヤーで吊り上げていたらしいのだが、それが切れたらしく、ちよつと明日実の真上に落ちてこようとしていた。

Part 15：孝の学校復帰とクラスメートの優しさ（後書き）

学校に復帰したその日に再び危機迫る！

明日実は、そして孝はどうなる？

あと1話か2話で完結予定です。

それでは次回に続く！

Part 16：奇跡再び（前書き）

日を追うごとにアクセス数が増えていつて本当に読者様に感謝したい気持ちでいっぱいです。

せっかく学校に復帰したのに再び危機が迫る。明日実は、そして孝は――

Part 16：奇跡再び

「きゃあああ!？」

「明日実ちゃん!！」

孝はとっさにカバンを投げ捨てると、渾身の力を込めて明日実にタックルして突き飛ばした。

「た、孝くん!」

椿が後ろから叫んだそのとき、ドンガラガッシャンという大きな音とともに鉄骨が地面に落ち、その音を聞きつけて近所の人が駆けつけてきた。

「大丈夫か!？ いったい何があった!？」

近くにいた椿にそうたずねると、

「上から鉄骨が落ちてきて、友達が……」

そこまで言ったとき、落ちた鉄骨の向こう側から明日実がゆっくり立ち上がるのが見えた。

「明日実! 大丈夫なの!？」

椿がそうたずねると、

「うん、孝くんが突き飛ばしてくれたから……孝くんは!？」

明日実がそう言って後ろにある鉄骨の方を見た。すると、地面にめり込んだ鉄骨のすぐ脇に倒れてる孝を見つけた。

「孝くん! しっかりして!」

明日実が呼びかけると、孝はゆっくり目を開けた。

「う……明日……実……?」

孝がうめきながら明日実の名を呼んだ。そこに警察と消防に連絡を済ませた椿がやってきて、

「孝くん! 大丈夫!？」

と呼びかけると、

「ああ……大丈夫だ。ギリギリのところで直撃は避けられたよ……明日実は大丈夫なのか……?」

孝はそう答えた。

「明日実……って、まさか、孝くん……！」

明日実の名前の呼び方の変化に気づいた椿が確認すると、

「ああ……オレは今の衝撃で記憶をすべて思い出したみたいだ。心配をかけたな……」

孝はそう答えた。

その後到着した警察と消防により鉄骨は片付けられ、工事責任者が逮捕されるまでに至った。

孝たちは奇跡的にケガも無く、簡単な事情聴取の後帰宅した。

そして、孝の家にて。

「孝くん、本当に記憶が戻ったの？」

明日実が改めて確認すると、

「ああ、なんでもかはわからないが、さっき明日実を鉄骨から守ったときに突然あの事故のことがフラッシュバックして、全てを思い出したんだ。こういうのを奇跡って言うのかもな」

孝は少し笑いながらそう話した。

「でも、本当によかった……！！」

明日実はそう言いながら孝に抱きついた。

しばらくして、明日実も落ち着いて離れたあとで、

「そっぴゃあの事故のせいで記憶を失ったから先延ばしになったが、そろそろ結論出さないと。本当は事故の前に決まってたんだけど……2人とも、心の準備はいいか？」

孝が急にまじめな顔をして2人にたずねる。

「えっ、ああ、うん。大丈夫だよ」

「私も大丈夫よ」

2人ともそう答え、

「じゃあ、言うよ。オレが選ぶのは——」

Part 16：奇跡再び（後書き）

本当にそれは奇跡だったのか、ついに記憶を取り戻した孝が選んだのは――？

次回、最終回です、お楽しみに。

T h e L a s t P a r t : そして1ヵ月後（前書き）

結論を出した孝が選んだのは――？

The Last Part:そして1カ月後

～1カ月後～

「ただいま～～」

孝が事故に遭ったとき旅行中で連絡の取れなかった両親が帰ってきた。

「おかえり。今度はどこまで行ってたの？」

孝がそうつたずねると、

「今回はハワイに1週間、ロサンゼルスに1週間、ニューヨークに1週間、最後にロンドンに1週間だ。はい、お土産」

孝の父はそう言くと、各地のみやげ物を孝に手渡した。

「はあ、親父……海外にいたから連絡取れなかったのか……」

孝がため息混じりにそう言くと、

「ん？ 何かあったのか？」

父がそうつたずねた。

「ああ、思いつきりあつたよ……いろいろ大変だつたつて言うのにぜんぜん連絡取れないんだもん」

孝はそう答え、この1ヶ月に遭ったことを話した。

「事故に遭つたつて……もう大丈夫なの？」

黙つて話を聞いていた孝の母がそう聞いた。

「ああ、一時的に記憶喪失になつてたが、今はもう記憶も戻つてるし、ケガは元々大したことなかったから。その事故のときになんとか親父たちに連絡とろうとしたのに、結局連絡つかなくて北海道から叔父さんに来てもらつたんだよ。後で電話して謝っておいてね。来てもらったときにオレからも謝つたけどさ」

孝はそう答えた。

「そつか……すまなかつた。これからは少しは旅行を自重しよう」

父はそうつぶやいた。

翌朝、孝はいつものように自宅を出発し、1ヶ月前に恋人同士になった椿を迎えにいった。

（そう……オレはあの日椿を選んだ……もうあれから1ヶ月か……）

*****回想*****

「オレが選ぶのは——椿、お前だ。最後まで悩んだけどな……でも、自分の気持ちにウソはつけない。今だからこうして言えるが、オレも中学のときひそかにお前にあこがれてたんだ……」

孝はそう告げると、

「孝くん……そうだったんだ……！！」

椿はそう言って孝に抱きつき、

「ははっ……長かった初恋も終わっちゃったか……」

明日実はその言ってわずかに涙を見せるのだった。

「明日実……すまない……」

孝が謝ると、

「なんで孝くんが謝るの？ 私なら大丈夫。明日にはきつとも私の私だから……」

明日実はそう言うのと孝の家を出て自分の家へ帰っていった。

翌朝、孝が家を出ると、

「孝くん、おはようっ！一緒に学校行こう！」

明日実はすっかり元気になっていた。

途中で椿も合流し、結局孝と椿は恋人同士になったものの、初日は二人つきりとはいかなかった。

あの日のことを思い出しているうちに、椿の家の前に着いた。と、ちょうど椿が家から出てくるところであった。

「おはよう、椿」

孝が手を上げて挨拶すると、

「あつ、おはよう、孝くん」

椿も同じように手を上げて挨拶し、今日は二人つきりで登校した。

そして昼休みのチャイムがなると同時に、孝は殺気を感じてドアのほうを振り向いた。

「孝くん……ひどいよ……一人で先に出ちゃうんだもん……」

明日実が恨めしそうにそう言うのと、

「あのなあ……オレと椿は恋人同士であつて、二人つきりになりたいたと思うのは当然だろ？ そのところわかつてくれよ……」

孝が呆れたようにそうつぶやく。

「一度はふられたけど、まだ勝負は終わってないわ。だって、結婚しちゃったらそれまでだけど、まだそれは先の話なわけだし……？」

明日実がそこまで言った瞬間、孝はふと嫌な予感がしたので、目で椿に「ゴメン」と謝り、教室から逃げ出した。

「あつ、逃げた〜！ まだ話は終わってないよ〜！ 孝くん、待って〜〜〜！！」

結局、今日も今日とて二人の追いかけっことは続いていくのであった。それが半年後には校内名物となることをまだ誰も知らない……

完

The Last Part:そして1カ月後（後書き）

これにて第一部は完結となります。ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございます。

ご意見、ご感想、批評などありましたらぜひ書き込んでくださるとうれしいです。

今後の参考にさせていただきたいと思います。

追記

この物語の続編「ラブコメ?―Second Season―」もあります。シリーズの完結編となっておりますのでよろしければどうぞ。

また、遅ればせながらネット小説ランキング（現代コミカル部門）に登録しました。

投票していただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0987b/>

ラブコメ？

2010年10月8日14時04分発行